
ラノベ執筆に関する、間違った二五六の方法

阿波座泡介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラノベ執筆に関する、間違った二五六の方法

【Nコード】

N5354T

【作者名】

阿波座泡介

【あらすじ】

執筆中の小説にダイブして、物語のキャラとして執筆を助ける。そんな力を持った主人公『藤浪トモ』の話です。

母親が執筆するライトノベル『レオ・ファブラ』にダイブして遊んでいた藤浪トモ。彼には、その能力が幼い頃からあり。その力が普通であると思っていました。

従兄妹の水上カズネを誘って、一緒に物語にダイブした事もありました。

それが異能である知るとレオ・ファーストに入る事を止めました。すると、母親はレオ・ファーストを書けなくなってしまったのです。レオ・ファーストは、物語に入れるトモと母親の合作だったのです。

トモは、母親のマネージャーであるカズネの姉のチカの協力も得て、積極的にレオ・ファーストにダイブするようになったのです。

そして、ある時。

どうしても、物語がうまく動かせなくなってしまいました。

トモたちは、この事態の解決のために、東雲マユに協力を申し込みますが。

さて、どうなるでしょうか？

前章

勇者レオである、藤浪トモは深いため息をついた。

確認の為、もう一度、自分の左手を見る。

勇者レオの左手は透けていた。

透けた手を通して、破城槌の打撃で崩れようとしている外城壁が見える。

もう、時間が無い。

すでに、この世界に留まれる時間は過ぎていた。

トモと、トモと一緒に来たカズネは、この世界から消える。

そして、たぶんこの世界……王都ウルブリネが陥落しつつある世界も、消えるだろう。

「今回も、失敗だ」

トモは、これで何回目だろうか？ と自らに問うた。

「8回目ですわ。信じられませんか」

サニア姫であるカズネの声が響く。

サニア姫はウルブスラントの実質的な支配者にして、城崩し姫の二つ名を持つ王位継承者。

だが彼女の国は、侵略者の手に侵されようとしている。

「私の国が……この『火炎と踊る者』が、8回も負けてしまうまで」
サニア姫は、王城のバルコニーから民衆に手を振る時のように、その姿勢にはいささかの乱れも無い。ただ、身に着けた豪華な真紅のドレスは泥と煤で汚してはいるが。

姫と勇者が立つのは王都正門城門上に備えられた巨大呪文詠唱支援設備『マズルカ魔法陣台』。

聖別された一枚岩に幾つもの魔方陣を刻んだウルブリネ最大の攻撃魔法施設だ。

周囲の大小の魔方陣では、神官や魔術師がそれぞれの呪文を詠唱して魔法を活性化させている。

サニア姫は中央の魔方陣に立ち、すでに呪文の詠唱を終え、トリガーワードを唱える瞬間を待っていた。

勇者は姫の後方の魔方陣で魔力の活性化を助けていた。彼らが使おうとしているのは範囲攻撃魔法では最高位の『メキド・フレイム』。

使用には20人近い魔法使いや聖職者による半日の詠唱が必要である。

だが、メキド・フレイムを使っても、この戦争を終わらせる事はできないだろう。

「もう、時間だ。この呪文を撃ったら、僕らは帰らなくてはならないよ」

トモとしての勇者レオの言葉に。

「そんな事はわかっています」

姫の言葉が終わらぬ内に、外城壁は崩れ、破城槌を担いだゴーレム兵の姿が見えた。

「ですが、今はこの一撃に集中なさい！」

姫の言葉に勇者が首肯する。

「そうだな」

城崩し姫を中心に、空間が歪み急激に広がった。

「デミ・ヴォル・ゲイン！」

サニア姫の唇が、トリガーワードを紡ぐ。

その瞬間、藤波トモの意識は王都ウルブルネの上空にあった。

足元で、閃光が走り。

雲が乱れ、沸き立ち。

風が奔り、大地が揺れた。

数十体の巨大な人型の像が、崩れ、砕け、消し飛ぶ。

見えないが、その数百人の敵兵も、消し去られた事だろう。

「それだけ……だな」

藤波トモは、呻くように呟いた。

彼の意識は、ムーリアの大地から、どんどんと離れてゆく。

「また、負けちゃったね」

トモの横には、見えないがカズネの気配があった。

「もう一度、やり直しだな」

彼らの意識は、トモの母が執筆中であるライトノベル『レオ・フ
アーブラ』の世界から戻ってきたのだった。

前章（後書き）

長編に挑戦しようと書き始めました。
終わりは……分かりません。

1章 1

「とても美味しいお茶ですね」

と呟いたのは、藤浪トモとテーブルを挟んで車椅子に座る少女。

ここは藤浪トモの自宅の一階。

住居というよりオフィスに近い雰囲気がある。

「あら、うれしい」

と、語尾にハートマークを付けそうな柔らかい声の主は水上チカ。

チカの落ち着いた物腰はトモより年上のものだ。少なくとも、アルコールOKの年齢だろう。

しかし、背の高さと顔つきから判断すると、十代前半にも見えてくる。

そのくせ、胸と腰の曲線は成熟した女性のもの。

チカは藤浪トモの左隣に盆を抱えて立っている。

トモの右には水上カズネが座る。

「チカ姉のお茶は最高だよね」

カズネは、トモと同じ年の従兄妹になる。

カズネとトモは姉妹。

家が近く、親戚である藤浪家と水上家の交流は深かった。

「ちょっと、先生の様子を見てくるわね」

と、チカは部屋を出て行った。

先生とは、トモの母親であり『レオ・ファブラ』の著者である藤浪アイコである。

水上チカは、アイコのアシスタント兼マネージャーとして働いている。

主なワークスペースは、藤浪家一階にあるアイコが執筆に使う仕

事場と資料室。

資料室は打ち合わせスペースと休憩室も兼ねている。

しかし、休憩室とは言っても主であるアイコは、この部屋で休むことはない。

仕事に入ると仕事場のPC前に座り続け、トイレ以外には動かない。

それが、アイコのワークスタイルだった。

いきおい、チカの仕事のメインは、アイコの健康管理と藤浪家のライフライン維持となる。

「マユちゃん、このクッキーもおいしいよ」

カズネは、金属缶入りのクッキーを両手に掴むと、車椅子少女の前の皿にザラザラと盛り上げる。

「カズネ」

トモは、小さく声をかけた。

「あっ！ これね、見て見て。このストラップ、『レオ・ファークラ』アニメ化記念の特別なやつでレアアイテムなんだよ。ステキでしょ」

カズネは、自分のケイタイのマスコットストラップを見せ。

「これは私の宝物なんだけど、マユちゃんにあげるね」

と、言ってストラップを外そうとする。

「いえ、それはカズネさんが持っていたほうがいいわ」

車椅子少女がカズネを制した。

「えっ？ でも、特別なやつだよ。宝物だよ」

お預けをくらった子犬のような表情のカズネ。

「カズネ、それは母さんがカズネにあげたやつだろう。僕もカズネに持っていてほしいな」

トモのカズネを諭す。

「う……うん。まあ、トモがそう言うなら……」

渋々という風に、ケイタイを仕舞うカズネ。

トモは一息つくと、決心したように背筋を伸ばして車椅子少女に向き直り。

「東雲マユさん。僕の言った事を信じてくれるかい？」

車椅子少女――東雲マユは、トモの視線を鷲掴みにするように睨み返し。

「あなたのお母様が執筆中の小説の中に入れるって御伽噺？」

トモを睨みながらマユ。

「その御伽噺だよ」

マユの視線を受け止めてトモ。

「信じられわけが無いわ」

きっぱりと断言して。

「でも、私はトモ君の言葉に縋るわ」

フツとマユの目力が軟らかくなる。

「溺れる者は藁にも縋る」

マユは諺をあげた。

「私は、今、溺れているの。トモ君の言葉は、藁だわ」

1章 2

東雲マユは、困惑していた。

2年前に交通事故で両足の機能を損なったマユは、車椅子を使うようになった。

もともとが本の虫で、歴史が好き。本があれば、一日中でも読み続けているような子供だった。

それゆえに、歩けなくなった当初はショックだったが。落ち着いてくると、歩けない事はちよつと不便だと思ふようにした。

事実、家も学校も図書館もバリアフリー。

欲しい本は通販。

車椅子は、慣れると快適な移動手段だった。

しばらくの間は、そうやって暮らしていた。

本が読みたいときに、外で遊べと言われたりしなくなって良かったとさえ思ふようになった。

だが、意外な欲求がマユを苦しめた。

『歩きたい』

ただ、単に歩きたい。

普通に、自分の足で大地を踏みしめて歩きたいのだ。

そんな思いが、ある日氣がついたら、心の底にゴロリとこころがつていた。

大きな石のように、ころがっている。

無視するには、少々大きすぎる石だった。

いや、このサイズなら岩と言ってもよいだろう。

と、そんな感じで『歩きたい』思いがあった。

東雲マユは、本を読みたい以外には特に強い欲望を持ってはいなかった。

だから、この強い欲望を、どうしていいのかわからなかった。

苛立った。

楽しみにしていた月刊『歴史を歩く』も未読のまま机の上にあるありさまだった。

そんな時に藤浪トモが「僕と一緒に小説の中に入ってくれませんか？」と、能天気な声をかけてきたのだ。

腹立たしいより、呆れてしまった。

幸運の壺やパワーストーン・ネックレスの方が気が利いている。

でも、もし小説の世界に入れたら、自分の足で歩けるかも、と、思ってしまった。

3Dで話題になった映画のDVDを見たからかもしれない。

そうだ。試してみても損はない。

失うのは時間くらいのもの。

マユは、藤浪トモの申し出を受けることにした。

1章 3

深い深い霧の中から、無数の文字が現れたは消える。

「まったくオカルトね」

東雲マユが呟く。

「もうすぐ、ムーリアが見えるよ」

藤浪トモが、霧の先を指差した。

彼らは、いまレオ・ファースブラの世界に入ろうとしている。

唐突に霧が晴れ、光があふれる。

「こ……こんな……すごい……」

マユは、眼前に広がる圧倒的な存在感の世界に圧倒された。

それは、まさに世界だった。

ムーリアには、山も海も川も田畑も町や村……すべてがあった。

彼らは、旅客機で成層圏から空港にアプローチするように、天空の雲の中にある特異点から大地に降りようとしている。

この時点では、彼らは霊体のような存在であるが、互いの気配を感じる事や会話はできた。

「あそこが、王都ウルブリネだよ」

水上カズネが、2重の城壁に囲まれ、中央に王城と思われる大きな建造物がある都市を指した。

「また、円卓会議から始めるの？」

カズネがトモに声をかける。

「そうだね。その辺は、話が固まっていると思うから、早回しでいいか？」

「そうする。ケス平原の戦いからだね、話を換えられるのは？」

「今回も暗殺は無しですか？」

トモとカズネの会話に、割り込んできた声はカズネの姉のチカ。

「それは無しだよ」

「今回も見せ場無しですね。残念ですわ」

心底沈んだ声のチカをカズネが慰める。

「トモくん。私の役目はドアーデ將軍の娘で従軍神官のレーリアなのだな」

「はい、マユさんには回復役と戦況の分析をお願いしたいんです」

「その件だが、すまない」

言うトマユの気配が遠ざかる。

「えっ？ マユさん……どうしたんですか」

トモは、慌てて、掴めるはずのない霊体を捕らえようとジタバタした。

「そのキャラでは、この物語を動かせない。私は……に……」

急激に遠ざかるマユの気配。すでに念話も届かないほど遠くに離れたようだ。

「なんてこと」

呆然とするトモ。

物語世界に他人を連れて来たことは何度もあるが、念話も届かないほど離れた事はなかった。

「ねえ、マユちゃんどうしたの？」

「大丈夫でしょうか？」

カズネとチカが声をかけるが、トモは何とかマユの気配を感じようと意識を集中する。

「……どうやら、無事に世界に定着したようだけど……誰になったのか分からない」

「ええっ！ どうするの？」

どうすると言われても、トモにもどうしようも無かった。

「トモさん。こちらも定着しないと。対策はそれから」

冷静なチカの声に、トモは落ち着きを取り戻し。

「うん。そうだね。じゃあ、僕らも定着しよう。」

ウルブリネ城の上空に浮かんでいた一同は、ストーンと落ちる感覚で、それぞれのキャラに定着していった。

1章 4

不穏な空気が、円卓会議の議場を満たしていた。

ここは、戦場ではない。

魔物が闊歩するダンジョンでもない。

しかし、戦場やダンジョン以上に緊迫した空気があった。

（はあ、いやだなあ）

勇者レオに定着した藤浪トモは心の中でつぶやいた。

魔物との戦いやら戦場には慣れたけれど、政治の駆け引きという場は慣れることが出来ない。いや、慣れたくも無い、と言うのが本心だった。

（とは言え、今回の小説ではウルブランドの内戦が舞台。しかも、対立の中心が人種問題だしなあ）

ここでの対応を間違うと、味方が減るばかりか敵が増える。

そして、前回もウィンバル公爵側の物量に押しつぶされたのだ。

「それでは、ボイザー殿はいらっしゃらないと？」

ドアーデ將軍が声を荒げて立ち上がり、ボイザー・ウィンバル公爵の代理で会議に出席しているラキスン男爵を睨みつける。

「左様です、將軍閣下。魔物とその眷属に支配された王宮にいては、いつ寝首をかかれるか。おお怖い怖い」

男爵は、わざとらしく怖がっている。

「ラキスン様、魔物の眷属とは私のことか？」

ウルブランドの第一位王位継承者であるサニア・カイ・ウルブリネがラキスン男爵を見る。

（カズネちゃん、あっちでは普通の女の子なのに、サニア姫に定着すると偉そうだなあ）

剣呑な雰囲気にも関わらず、レオに定着した藤浪トモはボンヤリと考えている。

「姫殿下の察しの良さには、このラスキンも驚きです。ウルブランの王位継承者は聡明だ」

男爵の軽薄な笑いが議場に響く。

「姫を愚弄するか！　そこに直れ！」

ドアーデ將軍が腰の剣に手をかけようとするが、それを勇者レオが止める。

「ラスキン殿。私が魔物呼ばわりされるのはかまわないが、姫には謝罪していただきたい」

レオは静かに、しかし重い言葉を告げる。

「これは勇者殿。それでは勇者殿は、自ら魔物であると認めるのですかな？」

舐めるような視線で男爵がレオを見る。

「私は人間だ。だが、貴君らの考えでは、違うのだろう」

「勇者殿も聡明でいらっしゃる」

男爵の軽い笑いの中で、レオは懷から一個のジェムを取り出した。

ジェム。

この小さな鉱石が、今回の騒乱の根源である。

ジェムとは、魔法を貯める機能を持つ宝石の総称。正式には『魔晶石』と言う。

この世界にかつて溢れていた魔力は、魔法特異点たる魔王によるものだった。

勇者レオが、魔王を倒したのは四年前。

そして、魔王の正体が魔法特異点である事に気がついて、これを潰したのが二年前。

その為に、この世界からは徐々に魔力は減ってゆき、魔法も弱くなり、魔物も減っていった。

だが、この世界は魔法に支えられている産業も多い。なんとか魔力を取り戻すと幾つかの方法が試された。

そこで注目されたのは、全ての知的生命が放つ微小な魔力放射だった。

人が一日に放つ魔力の量は微笑で不安定。日の光や風に触れると、すぐに拡散し分解してしまう。

その微小な魔力を吸収して蓄えるのがジェムなのだ。

このジェムは、昔から護符や蛍灯として使われたきた。

つまり、自分が放つ魔力を蓄え、必要な時に放出して使ったのだ。力が弱いので、小さな灯火として使ったり。半年くらい貯めた魔力で治癒魔法や防護魔法を作動させていた。

ホイザー・ウィンバルは、このジェム利用を積極的に進めていた。住民の全てにジェムを配り、一定時間身に付けさせてから回収したのだ。

塵も積もれば山となる。

諺の通り、この方法は手間と時間がかかるが確実に大量の魔力を集めることが出来た。

このジェム方式は、アツという間にムーリア中に広がった。

ウィンバル公爵は、このジェム方式を広く公開したばかりか、普及に積極的であった。

ジェムの公開市場を創設して、大量のジェムが流通する仕組みもつくった。

ムーリアに平和をもたらしたのが勇者レオならば、繁栄をもたらしたのはホイザー・ウィンバルと言われるほどなのだ。

だが、ここで問題が起こった。

ジェムの魔力は、魔法回路や魔術師によって使われる。

正常に使えば、魔力は魔術の効果に変化して何も残さない。

わずかに残る魔力の滓も、風に薄められ日の光で消え去る。

しかし、ある種のジェムは、魔力として魔法に使うと、魔法は誤作動や暴走をおこし、後に大量の呪い（カース）を残してしまうのだ。そのジェムとは、エルフやドワーフの生体魔力を蓄えたジェムなのだ。

ホイザーは、エルフやドワーフを亜種族と呼び、魔王の出現は亜種族の生体魔力放出である断じた。

そして、この発言を聖教会が公式に認め、ホイザーは聖人となった。

ホイザーはエルフやドワーフの分離を主張。

ここに、亜種族追放令が教会から出された。

エルフやドワーフは、ウルブラントから追放される事となった。

これに反対したのはウルブ王室である。

魔王討伐の戦いでは、エルフ族やドワーフ族の協力があった。

たかが人間族の宗教にすぎない聖協会が、異教徒であるエルフやドワーフを追放するのは無法であり、道理に反する。

この主張で、教会も亜種族追放令を取り下げようとした。

自体は沈静するかに見えた。

だが、この時、ホイザーが勇者を告発した。

「勇者は亜人種であり、第2の魔王となりうる」

王家この発言に反発しなかった。

その為に、自体は一気に動きはじめる。

1章－4（後書き）

主に説明だけの今回です。

エンターテイメント的に状況説明するのは難しいなあ。

1章 15

王都ウルブリネ 王城 謁見の間

「ここまででは、いつもと同じですわね」

玉座に胡坐をかく、サニア姫。

「姫様、はしたのうございますわ」

姫をたしなめるのは、なぜか本格的なメイド服を着こなす女官のクレハ。中の人は水上チカである。

「うゝん」

一人であちらこちらを向きながらうなり声をあげているのは勇者レオこと藤浪トモである。

「ちょっと、聞いていますね？ レオ」

「うゝん」

レオは、聞こえない風に、何かに集中している。

今、レオは念話に集中したいのだ。

（なんとか東雲さんと念話を繋がないと）

レオこと藤浪トモは、行方の知れない友人を探そうとあせっていた。

深く深く意識を念話に集中すると、かすかに感じるものがあつた。
（なんとかいけるか？）

レオは、さらに念話に集中した。

「もう、そんなにマユの事が心配なのかしら」

呆れたような怒ったような風のサニア姫に、クレハが。

「それは、しかたありませんわ。東雲さまとは、小説にダイブ中に別れたのですから。誰に定着しているかも分かりませんし」

「何か考えがあつての行動ですわ。心配しても仕方がないのでは？」

「そうかもしれませんか……」

サニア姫のカップにお茶をそそぎながら、クレハ。

「連絡くらいはとれませんか、これからの方針もありますし」

「まあ、そうですね。分からないものはしかたございませんでしよ」

クレハがくれたお茶を優雅に飲むサニア。

そこに突然の大声。

「わかった!」

レオが叫んだのだ。

「もう、突然」

サニア、口元を拭きながら。

「わかったよ。サニア、クレハ」

「まあ、ようございましたわ」

「で、誰なの」

サニアとクレハは、レオが東雲マユが定着した人物を発見したと思っただが。

「あっちの方だよ」

レオは、東の方向を指してニコニコしている。

「……あの……わかったって……方向だけ?」

がつくりと肩を落としたサニア姫と。

「それでも、何も分からないより良ろしいのでは」

と、返すクレハは、メイド服を一瞬に脱ぎ捨てた。その下からは、体の線がはっきりとわかる薄手のレオタード風の戦闘服が現れる。

戦闘服と分かるのは、要所を薄い鉄板や鎖帷子で補強しているからである。

「姫、このクレハに御下命を」

クレハは片膝をついて頭を下げる。

「レオ。クレハをマユ探索に向かわせるが、良いかしら?」

「勿論だよ、サニア。クレハさん。東雲さんを見つけてきてね」

「ご命令のままに」

との言葉を残し、クレハの姿はサニアとレオの前から消える。

「さて、そろそろ、ドアーデ將軍が報告に来る頃だけど……」

レオの言葉が終わるかいなかで。

「姫様！ 勇者殿！ 大変ですぞ」

ドアーデ將軍、その人が謁見の間の扉を押し開けて入ってきた。

「ほらね」

レオは小声で呟く。

「騒々しいな將軍。何事か」

サニア姫は、さも大事な話し合いを邪魔された様に、不快そうに眉をひそめた。

「ご無礼は承知の上。されど火急の知らせであります」

「許す。申せ」

將軍は、軽く頭を垂れると。

「民が亜人刈りと称して、エルフやドワーフを刈っております。それも、あちこちで」

サニアとレオは軽く目を合わせ。

「教会の扇動か？」

「間違いありますまい。亜人狩りがおきております地では、祈りの刻でもないのに教会の鐘が鳴っておるそうです」

「間違いなさそうですわね。將軍、馬車を用意なさい。大聖堂にまいりますわよ」

ドアーデ將軍は、拳を掌と打合せ。

「殴り込みですな。坊主どもにガツンと一発かましましょうぞ。不詳このドアーデ、お供いたす」

「馬鹿者。話し合いですわ。だが、ドアーデ將軍には同行を願います」

將軍は軽く膝を折り、サニア姫に頭を垂れ。

「ありがたきお言葉。では、まいりましょう」

言うが早いか、將軍は足を返すと「誰かある！ 馬車の用意だあ！」と吼えながら大廊下をズカズカと進んでゆく。

「レオ、と言う訳ですわ。私は教会へゆきます。貴方は、エルフやドワーフを守ってくださいな」

サニアの言葉を聴いているのかいないのか？ 少し上の空のレオは。

「鐘か……うん、鐘だよ」

と、呟いている。

「レオ、聞いていますの？」

「サニア。いい考えが浮かんだよ。これで少しはマシになるかもしれない」

レオは満面の笑顔でサニア姫の顔を見つめた。

1章－5（後書き）

6月8日夜、一部表記を直しました。

1章 6

ウルブランド北方 アケア村近郊

勇者レオこと藤浪トモは、また念話に集中していた。

王都ウルブルネでは東の方に感じた東雲マユの気配は、ここでは東南に感じる。

「三角測量が使えるかな？」

レオは地図を取り出すと、王都から東へ線を引き、この村の場所から東南へ線を引いた。

二つの線は、ウルブランド東の高原地帯——通称ハイランド——で交差する。

「ハイランドか……」

レオは再び念話に集中した。

今度は、クレハの中の人水上チカにである。

（応答せよ。応答せよ。クレハさんの中の人……）

（はい。はい。こちらはクレハの中の人です。どうぞ）

こんな調子で、念話はすすむ。

この時、すでにクレハはハイランド地方に入っていた。

なぜ、クレハに念話を通じて東雲マユに通じないのか？

（そうですね。ハイランド地方くらいなら念話の範囲内ですよ）

（たぶん、こちらからの念話は東雲さんまでいってると思うんだけど）

（まあ、その辺は、おいおい調べましょう）

（お願いするよ。それから……）

レオは少し考えてから。

（やっぱり、止めようかなあ）

（なんです。途中まで話して）

（いや、でも、僕はアノ人苦手だしなあ）

思い当たることのあるクレハは。

（アウレア様ですか？）

（……ああ……うん。今回もいいよ。アウレアもエルフの事で手一杯だろうし）

（そういつて、今までボロ負けでしたよ）

（あう）

もう、仕方が無いなあとクレハ。

（ここまで来たから。私からアウレア様に連絡をつけます）

アウレアはハイランドに住んでいるレオの養い親だ。そして、王を持たないエルフの実質的な指導者である賢者なのだ。

レオは、子供の頃のロクデモない自分を知っていて、レオをいつまでも赤ん坊扱いするアウレアが苦手なのだった。

（じゃあ……その件もよろしく）

（はい、承りました。念話終了します。よろしいか？）

（はい、終了します）

「はあ」

深いため息をつくレオだった。

それは、さておき、この地では森エルフたちが人に狩られている。しかも、教会の先導によってだ。

早急にエルフを保護し、騒動を静めないといけない。

「僕の思いついた手で事態を収められるといいんだけどなあ」
破邪の利剣を持つ手に力があるレオであった。

1章 ー7

アケア村へ向かう街道

アベル・トラトは、ゴトゴトと揺れる蒸気トレーラーの荷台に固定されたゴーレムの中で空を見上げた。

「ずいぶん、遠くに来ちゃったなあ」

アベルは、自分の居場所であるゴーレム兵の操室でつぶやく。

アベルは、ウルブランド東部にあるトラト村の出身である。

村の名が、アベルの家名なのは、彼がトラトの統治者の息子とかであるからでは無い。

むしろ、逆なのだ。

彼は、トラトで農奴の家に生まれた。

6人兄弟の4人目である。

トラト村の統治者はウィンバル公爵家であった。

ウィンバル家は学校を統治領に建て、身分に隔てなく無償で教育を受けさせた。

しかも、その学校では、授業に出さえすれば無料で昼食が出された。

子供の多い貧乏な家庭は、それだけが目的で、子供を学校へと送り出す。

アベルも、そんな風にして学校に行った。

当初は、食事だけが目的だった。

しかし、徐々に勉強が面白くなり、のめりこみだす。

アベルは、優秀な成績で初等学校を卒業して、軍学校へと進級した。

成績が優秀だが、金が無い家の子供は、授業料が無料の軍学校に入るのが普通だった。

もちろん、卒業後には5年の兵役が課せられる。

ここでも、アベルは優秀だった。

2年生の終わりに、担当教官から特科学校への進学を勧められた。

これは、魔法兵器運用を前提とした新兵科の軍学校であった。

まだ、魔王戦争が続く世界である。

世界を二分する大戦争は、消耗戦となり、魔法を使える貴族軍はすりつぶされていった。

ジェム無しで魔法を使える貴族は、兵力としては強力であるが数が少ない。

ジェムを使う魔法兵器は、誰にでも使えた。

当初は補助兵力でしかなかった魔法兵器であるが、改良が進み、次第に戦線を支え、軍の一翼を占めるにいたった。

そんな魔法兵器であるが、使うだけならば誰でも使えるものだった。

引き金を引けば弾は飛び出す。

レバーを引けば、前進する。

それだけならば、誰にでもできる。

だが、軍勢力として運用しようとする、それではダメなのだ。魔法兵器を使う兵の錬度が必要である。教育が必要なのだ。

つまり、魔法兵器を使えるほどに優秀な生徒が全国から集められたのが特科学校であった。

アベルは、その中でもさらに優秀であった。

彼は、人が乗って操るゴーレム兵の操者となった。

ゴーレム操者は、騎士位に準じる地位が用意される。

そうでなければ、通常軍——貴族たちの軍と行動を共にしたとき、混乱が生じるのだ。

アベルには、その時まで家名は無かった。

ただ、トーラト村のアベルとだけ呼ばれていた。

騎士位叙勲の時、ウィンバル家から派遣された司祭様から、トーラト姓を名乗るように告げられた。恐れ多いと辞退しようとする。

『これはウィンバル公爵直々の賜りです』と告げられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5354t/>

ラノベ執筆に関する、間違った二五六の方法

2011年6月18日23時25分発行